

IV-22

道の駅の個性と立地特性について

秋田大学 学生会員 ○樋口 大介
秋田大学 正会員 木村 一裕
秋田大学 フェロー 清水浩志郎

1. はじめに

道の駅は、自動車利用者のための、24時間利用できるトイレや、休憩施設、情報提供機能を備えた施設であるとともに、食事ができたり、地域の産物やおみやげ、さらには温泉など、地元への経済効果、住民のためのサービス機能を有しており、道の駅に対する地域の期待は大きい。とりわけ地方部においては、こうした機能を持つ民間の施設が少ないために、道の駅整備が積極的に進められている。

しかしながら、こうした道の駅の整備が進むと、同じような機能を持った施設が、比較的短い区間に隣接して立地することになり、結果として利用者の減少を招き、地域の財政にも負担となる可能性がある。

2. 研究の方法

以上の観点から、本研究では道の駅の立地に関して、個性ある道の駅という視点から分析することを目的としている。分析にあたっては、道の駅を選択する要因をKJ法により抽出し、これに基づいて道の駅の個性を表す項目および具体的な内容を抽出した。ついで、これらの道の駅特性データについて、利用者に対して、隣接する道の駅と比較しながら、個性の有無を評価してもらった。これらの結果をもとに、クラスター分析により、道の駅の類似度を判定し、道の駅どうしの類似度としての距離と、実際の道の駅間の距離から、個性ある道の駅の立地について考察を行った。

3. KJ法による道の駅選択の要因の抽出

利用者が「道の駅」を選択する際、何を評価基準とするのかについて、道の駅をよく利用する学生15名を対象にKJ法を行なった。道の駅を選択する要因は、道の駅の機能や、利用者の状況、利便性、アクセス性などが考えられるが、道の駅の個性という点について図1に分析結果を示している。おもな要因は道の駅の各機能に対する利用者の反応と、情報の内容に分けられ。とくに食事や直売所で扱う物産などが、要因とし

てあげられた。

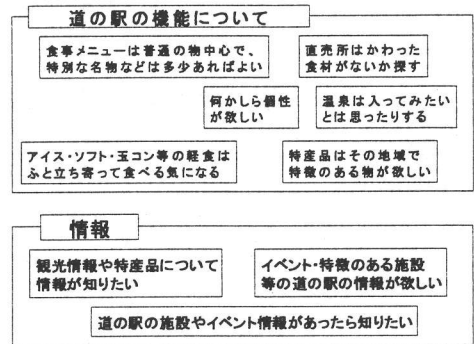


図1 道の駅利用要因に対するKJ法

4. 道の駅の個性、類似度による評価

道の駅の個性、類似度の評価対象とした道の駅を図2に示している。秋田市を中心に国道7号沿線、7号-285号-7号の沿線、7号-105号の沿線にある道の駅を対象とした。これらの道の駅を評価するあたり、KJ法により抽出された要因について、各道の駅の状況を調査しデータを作成した。その一例を写真1・表1に示す。

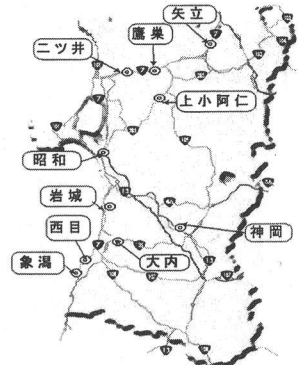


図2 道の駅の地図

これらのデータと、表2に示す道の駅選択に関する評価項目に基づいて、隣接する道の駅を比較しながら、被験者に道の駅の利用の意向をたずね、集計した結果を用いてクラスター分析を行った。



写真1 道の駅「象潟」

表1「道の駅」調査表

	象潟	コメント
食事	レストランメニュー カキの釜飯 魚介類を焼いた物 フランクフルト ハンバーガー ラーメン そば・うどん おにぎり	海の近くなので、売店では魚介類の食べ物が多かった。また、直売所で焼いて売っているのが新鮮でとても美味しそうだった。レストランのメニューは2000円近いものがあったとても高かった。ただ、焼き魚定食は800円と安めでおいしそうだった。しかし、トータルで考えると、レストランは高い、魚料理が少ないので、売店で食べる方が良いと思った。食事をするのなら海の近くなので、せっかくだからおいしい魚料理を食べたくなるのではないだろうか。
お土産	手焼きせんべい(実演販売) 烏海まりも水 海産物 天然薬石湯の元 福庭うどん 曲げわっぱ わむの花アイス 物産館で売っている菓子土産	お土産売場はとても広く、象潟のお土産だけでもかなりあった。利用する人は少し見ていくだけなのであまりお土産が多くあっても意味がないのではなかった。 手焼きせんべいの実演販売で出来たばかりのせんべいを食べさせてくれるのは面白かった。
直売	野菜 海産物 韓国キムチ	それぞれの直売所では、お店の人が声をかけていて、活気があった。珍しいものでは韓国キムチなんてのもあった。
施設	温泉 お土産売場 直売・売店 公園 スカイリドル(観覧車) 観光情報センター 展望台 レストラン 休憩所	この駅は色々な施設があって、もはや道の駅というよりは一大観光スポットであった。ただ、その分休憩機能はあまりなく休憩所は利用している人がいない状態だった。

表2道の駅選択に関する評価項目

評価項目
1. お腹が空いている時食べてみたくなる食事がある
2. 休憩で立ち寄った時に食べてみたい食べ物がある
3. 買ってみたくなるような地域の特産品がある
4. 立ち寄ってみたくなるような直売所がある
5. 休んでいきたいと思うような休憩所がある
6. 入ってみたくなるような温泉がある
7. 立ち寄ってみたくなるような文化施設がある
8. 歩きたくなるような周囲環境がある
9. 必ず見ていきたいような眺めがある
10. 自然にふれて楽しめる施設がある
11. 運動していこうと思うような施設がある
12. それを見て寄りたくなるような地域情報(観光・イベント)がある
13. 困った時に対応できる情報がある(病院情報)
14. 移動する時知っておきたい情報がある

「道の駅」の類似性を考察した結果、大まかには、図3に示すように2つのクラスター(①、②)に分類された。クラスター①に含まれている象潟、岩城、昭和の道の駅は、「散歩したくなるような周囲の環境」、「自然にふれて楽しめる」、「直売所」といった項目に関して評価が高く、景観や散歩が出来る環境について評価が高くなっていた。一方のクラスター②では、西目、上小阿仁の食事に関する評価が高く、また

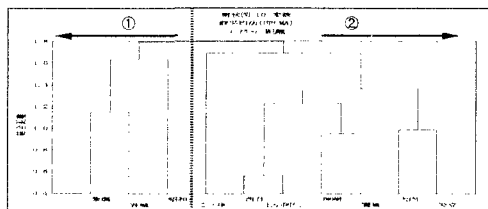


図3「道の駅」の類似距離に関する樹形図

西目、上小阿仁、神岡、鷹巣では道路情報の評価が高くなっていた。また矢立、大内の道の駅は休憩所の評価が高いクラスターであった。以上の分析から、クラ

スター②は食事休憩、道路情報といった移動のサポート機能に関しての評価が高いと言える。

5. 「道の駅」利用における実距離と類似距離の関係

道路利用者にとっては、類似した道の駅が連続することは、リフレッシュやドライブの楽しみという点からも好ましいこととはいえない。そこでクラスター分析から得られた類似距離と道の駅間の実距離をグラフ上に布置すること

で、道の駅の個性と近接性を考察した。図4は評価対象とした道の駅からなる3つのルートに関する結果を示したものである。いずれのルートでも隣接した道の駅間で類似性がみられている。とくにルート2の象潟、岩城、西目では、駅間距離が

20km程度と近く、またサービスの内容も、温泉や直売品など

において類似していることから、ドライバーにとっては、他方には立ち寄らないことになると考えられる。

6. おわりに

本研究では、道路利用者の視点から「道の駅」の個性に着目して評価を行なった。道の駅の利用には、地域住民の利用も多く、必ずしもドライバーの視点だけで評価できるものではないが、こうした道の駅の立地傾向は、民間の施設ではみられないものと考えられる。なお、本研究の対象とはしなかったが、道の駅の個性化とは別の視点として、相互の連携による情報提供、広域的地域情報の発信といった機能が、道の駅には期待されており、こういった視点からの道の駅の必要性についても考察する必要があると考えている。

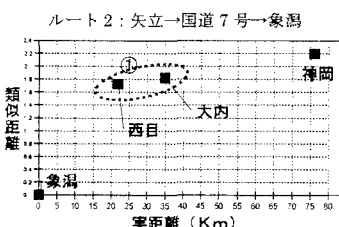
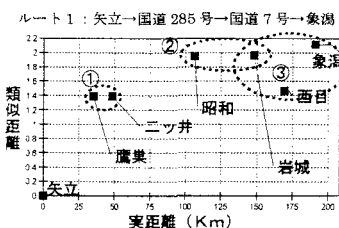
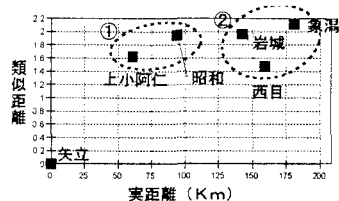


図4 実距離と類似距離の関係についてのグラフ